高齢者の学習活動と経費に関わる研究

ー今後の学習支援方策に向けての課題ー

今西　幸蔵
（神戸学院大学）

【要旨】
本研究は、高齢者の生涯学習を支援する立場から学習活動や学習環境の実態を調査し、学習活動の継続・発展のために不可欠である経費の問題を取り上げ、今後の支援方策を考えることを研究目的とした。研究の結果、高齢者が経費負担等の問題から学習方法を選択していること、学習の多様化や高度化を促進する要因として学習経費の問題が強い影響を与えていることなどを解明した。学習経費の問題に関連した学習支援方策として、ITの活用による学習機会のさらなる推進、公的社会教育等の経費負担の少ない学習機会の拡充、学習経費のコストダウンや資金提供のためのシステムの構築などが重要課題であると論じた。

1．研究概要

1.1 研究目的

本研究は、生涯発達の視点から高齢者の学習の特性をふまえ、研究対象としての高齢者の学習実態を把握しようとするものである。学習目標、学習内容や学習行動などに対する具体的な要求を理解し、高齢者が求める生涯学習をどのように進めるべきかを考察し、生涯学習支援の具体的方策につながる方向を示すことが目的である。とりわけ学習者の学習内容や行動に対して学習経費が与える影響がどうなのかを明らかにしようとした。本研究の背景には以下の課題が存在する。

①高齢者の学習参加の促進

各種の調査で、団塊の世代の多くが退職者となり、多様で活発な学習活動を行っていることが報告されている。高齢者がどのような学習活動を望み、参加しているのか、その実態を把握し、促進させるための学習環境や学習条件の在り方について研究する必要がある。

②高齢者の地域参画と社会貢献への期待

平成24年3月の超高齢化社会における生涯学習の在り方に関する検討会において、「高齢者が身体的にも経済的にも自立した生活を送っていくための体系的な学習や、これまでの人生での豊かな経験や知識・技能を地域参画・社会貢献に活かすための学習などの機会の充実について、高齢者福祉や高齢者就労支援、まちづくり・地域活性化等の関連部局とも連携しつつ推進していくことが期待される」とある。高齢者の学習成果の社会還元の可能性について検討することが必要である。

③高齢者の学習阻害要因と学習支援の問題

高齢者の学習を阻害する要因について分析し、学習支援として何が可能なのかを明らかにすることが重要である。特に予想される課題として「経費」の問題があり、生涯学習を推進していくための支援方策についての施策を考える必要がある。

1.2 研究の経緯と方法

国立教育政策研究所は、これまで、生涯学習の学習需要を定期的に把握するための各種の調査研究を行ってきている。こうした調査研究の発展的研究として企画・実施されたのが、平成22～24年度にかけて国立教育政策研究所が実施した『生涯学習の学習需要の実態とその長期的変化に関する調査研究』(研究代表者：立田慶裕)である。当該研究は「情報活用能力のニーズ」「社会人の職業教育」「家庭教育の支援」「高齢者の社会参加」の4チームが分担することによって実施した。筆者は「高齢者の社会参加と学習」(チーフ：笹井宏益) 研究チームに所属し、「高齢者の学習活動」に関わる調査を担当して結果分析に関わった。ここで得られた研究成果を基礎データとして、高齢者支援について考察したのが本研究報告である。

平成22年度には課題の理論と政策上の課題を検討し、質問紙を作成して予備調査を実施して課題を明らかにした。平成23年度にはPIAACとの関連を図りながら標本調査を行い、平成24年度は課題の長期的な動向を踏まえて、今後の生涯学習推進政策の方向性を明らかにするための実証的根拠を示し、今後の課題を明確にした。

2．調査の概要

2.1 調査の結果

本調査は全国を対象としてインターネットによる標本調査を実施したものである。1,000 サンプルの入手を目標にした有効回答数のうちで、質問項目に全回答されたデータを中心にして分析対象として抽出した。

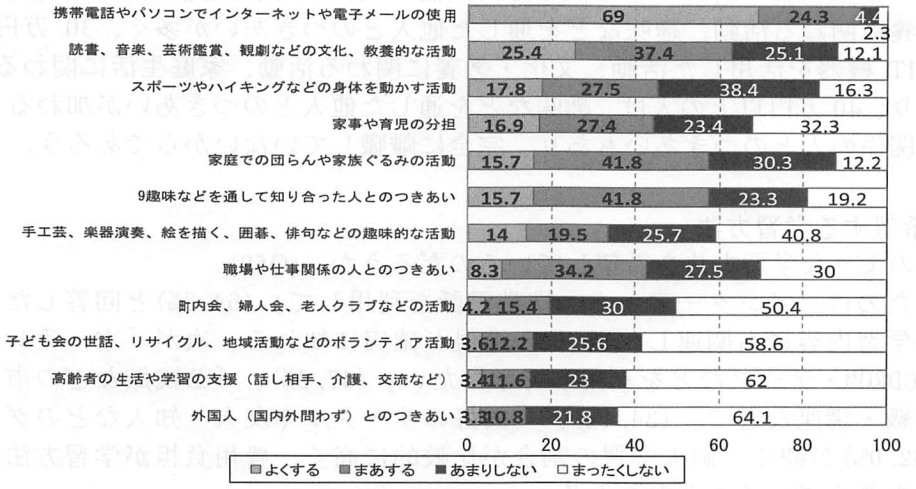
①調査期間：平成23年12月2日～12月8日
②配信対象者数：331,045
③配信数：27,000
④有効回答数：1,223
⑤採用回答数：1,000

2.2 高齢者の学習活動への参加

高齢者の学習活動への参加に関わる行動ついては 12 項目の選択肢から現状を把握し、(Q49)の図のような結果が得られた。「(学習活動を)よくする」と「(学習活動を)まあする」を加えた集計では、「携帯電話やパソコンでインターネットや電子メールの使用」(93.3%)を上げた人が高く、続いて「読書、音楽、芸術鑑賞、観劇などの文化、教養的な活動」(62.8%)、「家庭の団らんや家族ぐるみの活動」や「趣味などを通して知り合った人とのつきあい」(いずれも57.5%)が回答された。「携帯電話やパソコンでインターネットや電子メールの使用」を答えた人が93%を超えており、本研究の調査方法としてITを活用しているという点を考慮しなければならないものの、高齢者のIT利用が着実に広がっていることを示している。

次に「読書、音楽、芸術鑑賞、観劇などの文化、教養的な活動」などの文化・教養的な活動、家庭や家族を重視した活動や趣味を通した知人とのつきあいなどが高いことが目立つ。この結果から、(1)IT機器を活用した学習活動が着実に拡大していること、(2)文化、教養や趣味に関わるものが多いこと、(3)家庭生活を大切にしようとする意識が高まっていることなどがわかった。

Q49高齢者の学習活動への参加度とその内容（N=1,000）



学習活動で消極的な面がみられたものに、「外国人とのつきあい」「高齢者支援」「地域のボランティア活動」や「地域団体の活動」などがあり、対人関係で気を遣うような学習活動を避けることや、社会貢献型の学習活動に対して消極的な姿勢をとることがうかがえる。

クロス集計での「毎月の収入別」では、「10 万円未満」の人の学習活動は「携帯電話やパソコンでインターネットや電子メールの使用」が 91.0%で、以下「読書、音楽、芸術鑑賞、観劇などの文化、教養的な活動」「家庭での団らんや家族ぐるみの活動」が続く。「10 万円～20 万円未満」の人では、「携帯電話やパソコンでインターネットや電子メールの使用」が 93.4%あり、以下「読書、音楽、芸術鑑賞、観劇などの文化、教養的な活動」「趣味などを通して知り合った人とのつきあい」となる。「町内会、婦人会、老人クラブなどの活動」「高齢者の生活や学習の支援(話し相手、介護、交流など)」など、社会活動や地域活動をあげた人は少ない。「20～30 万円未満」の人の学習参加度は「10 万円～20 万円の人」と同じ結果であった。ここでも「町内会、婦人会、老人クラブなどの活動」や「子ども会の世話、リサイクル、地域活動などのボランティア」をあげた人は少ない。「30～40 万円未満」の人では、「携帯電話やパソコンでインターネットや電子メールの使用」「読書、音楽、芸術鑑賞、観劇などの文化、教養的な活動」「家庭での団らんや家族ぐるみの活動」の順になり、「40 万円以上の人」では、「携帯電話やパソコンでインターネットや電子メールの使用」が 97.5%で、次に「家庭での団らんや家族ぐるみの活動」「趣味などを通して知り合った人とのつきあい」「職場や仕事関係の人とのつきあい」となる。

クロス集計全体では以下の特徴が判明した。(1)学歴別にみると文化・教養や他人とのつきあいに相関があり、特に身体を動かす活動は高学歴者に支持されている。仕事別にみると、働いている人は他人とのつきあいを大切にしているが、完全に離職するとつきあいは急速に減退し、自分の趣味や身体的活動に傾斜している。(2)年代別にみると、壮年期後期の男性は IT 機器を活用した学習、家庭生活に関わる学習や他人とのつきあいが多く、同期の女性は文化・教養的な活動が多いことに特徴がある。

一方で、地域活動への参加意欲は低い。前期高齢者は、身体を動かす活動が中心となり、職場や仕事の人間関係は減少する。同期の女性は、趣味などを通した他人との

つきあいが多く、社会参加・社会貢献活動に参加している人の率も高いが、70 歳を過ぎると漸減する。(3)収入別にみると、30 万円未満の人は IT 機器を活用した学習活動や文化・教養に関わる活動、趣味などを通した他人とのつきあいが多く、30 万円以上の人は、IT 機器を活用した活動、文化・教養に関わる活動、家庭生活に関わる活動が多くなり、40 万円以上の人は、趣味などを通した他人とのつきあいが加わる。

職場や仕事関係の人とのつきあいもあり、完全に離職していないからであろう。

2.3 高齢者が希望する学習方法

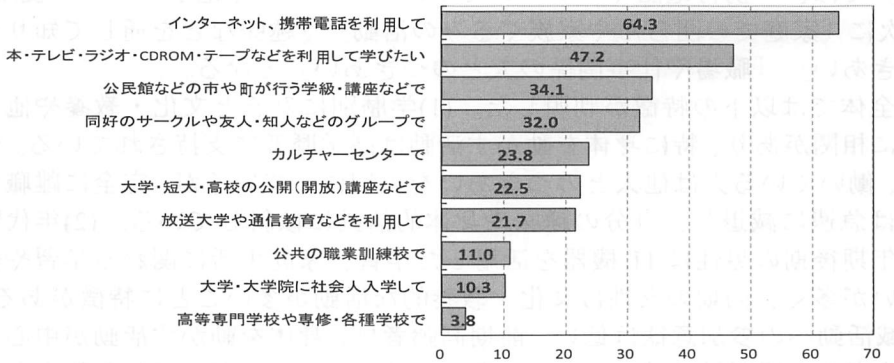
高齢者はどのような学習方法を希望しているのだろうか。(Q50)

最も多かったのは「インターネット、携帯電話を利用して」(64.3%)と回答した人で、前問の学習内容にも関連し、IT 化の進展が確実に知れる。次が「本・テレビ・ラジオ・CDROM・テープなどを利用して学びたい」(47.2%)、「公民館などの市や町が行う学級・講座などで」(34.1%)、「同好のサークルや友人・知人などのグループで」(32.0%)が続く。個人学習の割合が比較的に高く、費用負担が学習方法の選択に影響を与えていることがわかる。

次に「毎月の収入別」のクロス集計で、「本・テレビ・ラジオ・CDROM・テープなどを利用して学びたい」と答えた人では、月収「40 万円以上」の人が多く 54.2%になる。「インターネット、携帯電話を利用して」については、「30～40 万円未満」(73.1%)の人からの回答が多い。「放送大学や通信教育などを利用して」についても同様で、「30～40 万円」(31.1%)の人の数値が高い。「公民館などの市や町が行う学級・講座などで」は、「10 万円未満」の人の 40.2%が回答している。「カルチャーセンターで」と答えた人が一番高いのは「30～40 万円未満」の層であり、「大学・大学院に社会人入学して」については「40 万円以上」が最も高い率である。

こうした傾向に強い影響を与えているのは収入の問題であると思われる。設問のクロス集計結果からわかったことは、中等教育卒業者が高等教育機関やカルチャーセンターなどに学習参加することに課題があることを示す一方、公的な社会教育の場を希望する人が多い。「インターネット、携帯電話を利用して」などは学歴との相関はほとんどなく、男性は個人学習を好む傾向にあり、女性は集団学習への参加意識が高い。高齢期前半の人は、学習機会をあまり選択せずに積極的に関わろうとするが、高齢期後半になると人間関係が中心となる学習に向く傾向にある。また人々の学習活動の高度化・多様化は、当人の収入によって規定されている。

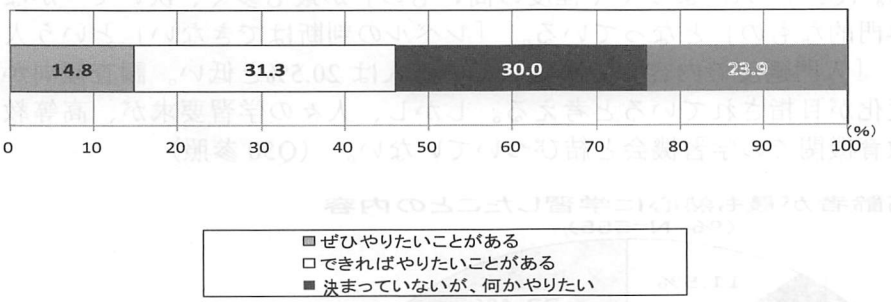
Q50高齢者が希望する学習方法(%, N=1,000, 複数回答)



2.4 学習者の学習要求と関心レベル

高齢者の学習要求・関心のレベルについての設問(Q51)であり、結果は以下の通りである。「できればやりたいことがある」(31.3%)、「決まっていないが、何かやりたい」(30.0%)であり、これに「ぜひやりたいことがある」(14.8%)というような潜在的学習要求・関心レベルの人を加えると合計で 76.1%になり、高齢者の学習活動に対する要求・関心が高い。「毎月の収入別」のクロスをみると、「ぜひやりたいことがある」と答えた人の中で「40 万円以上」の人が多く 21.2%あり、「できればやりたいことがある」とした人で 1 番多かったのは「20～30 万円未満」で 37.5%であった。高齢者女性の 2 割以上の人たちは、他の人たちに比べて学習意欲が強いこと、仕事中心の生活を送っている年齢層の人たちの学習関心がやや低いことが示されており、収入と学習関心との相関が強いという現状がみえてくる。

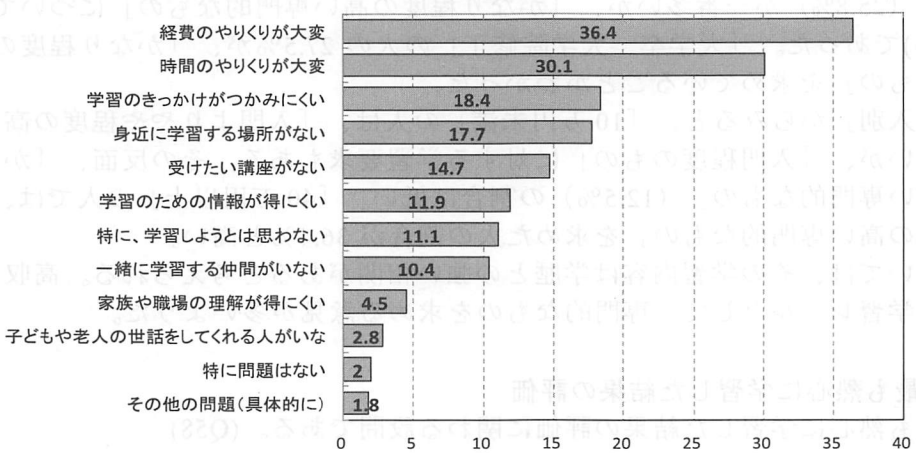
Q51高齢者の学習要求・関心のレベル



2.5 高齢者の学習開始時や継続時における学習環境の問題

(Q53)の設問では、高齢者の学習レディネス形成時に必要とされる学習環境として重要な要因が何かであるかを求めた。回答率が高いもの順にみると、「経費のやりくりが大変」(36.4%)、「時間のやりくりが大変」(30.1%)、「学習のきっかけがつかみにくい」(18.4%)などである。一方で「時に問題はない」(20.0%)、「特に、学習しようと思わない」(11.1%)という意見がある。問題の多くは、経済的負担、時間の確保、学習場所などの学習者の境遇に起因し、多様な学習機会の提供、学習

Q53高齢者の学習開始時や継続時における学習環境(学習レディネス)の問題
(%, N=1,000, 複数回答)

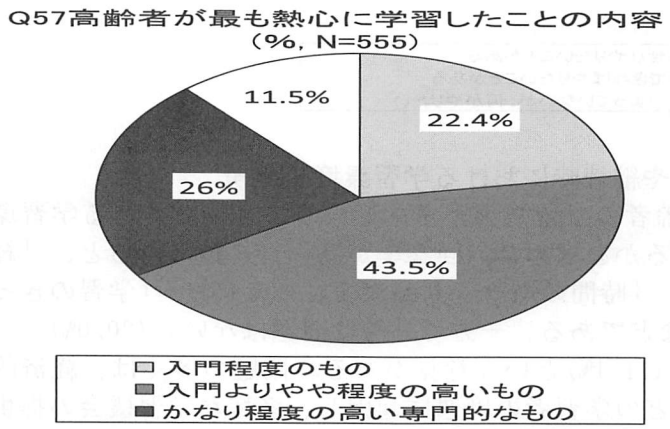


の契機づくりや学習情報への要求などの生涯学習支援が必要とされている。時間の確保、学習場所などの学習者の境遇に起因し、多様な学習機会の提供、学習の契機づくりや学習情報への要求などの生涯学習支援が必要とされている。

クロス集計で「毎月の収入別」をみると、「経費のやりくりが大変」だと感じている人と収入との関係に相関があり、「30～40 万円未満」の人は、「時間のやりくりが大変」だと指摘している。学習阻害要因の中で際立って多い意見は「時間のやりくりが大変」であり、この問題では性差はなく、女性の場合は加齢とともに問題が解決されるという訳にはいかないようだ。「経費のやりくりが大変」だという意見が多いが、これについては学習内容を工夫することによって対応しているようだ。

2.6 高齢者が最近 1 年間で最も熱心に行った学習内容（レベル）

本設問は、高齢者が最近 1 年間に最も熱心に参加した学習の内容のレベルについてたずねている。(Q57)「入門よりやや程度の高いもの」が最も多く、次いで「かなり程度の高い専門的なもの」となっている。「レベルの判断はできない」という人も 2 割弱いる。「入門適度の内容」で満足している人は 20.5%と低い。調査傾向から、学習の高度化が目指されていると考える。しかし、人々の学習要求が、高等教育機関や民間教育機関での学習機会と結びついていない。（Q50 参照）



Q57 の結果をクロスでみると、「学歴別」で「中学卒　高校卒」の人では、「入門程度のもの」（25.8%）が一番多いが、「かなり程度の高い専門的なもの」については低率(11.1%)であった。「大学卒　大学院修了」の人の 27.5%が、「かなり程度の高い専門的なもの」を求めていることがわかった。

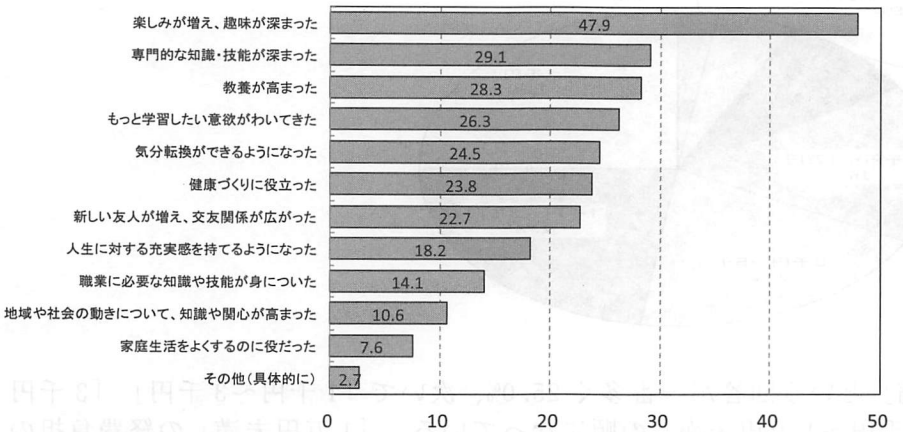
「毎月の収入別」からみると、「10 万円未満」の人は、「入門よりやや程度の高いもの」が多いが、「入門程度のもの」に対する学習要求もある。その反面、「かなり程度の高い専門的なもの」（12.5%）の割合は低い。「40 万円以上」の人では、「かなり程度の高い専門的なもの」を求めた人の割合が 36.4%と高い。

高齢者においては、その学習内容は学歴との強い相関があると考えられる。高収入者が求める学習レベルとして、専門的なものを求める意見が多いようだ。

2.7 高齢者が最も熱心に学習した結果の評価

高齢者が最も熱心に学習した結果の評価に関わる設問である。(Q58)

Q58高齢者が最も熱心に学習したことの成果(%, N=555, 複数回答)



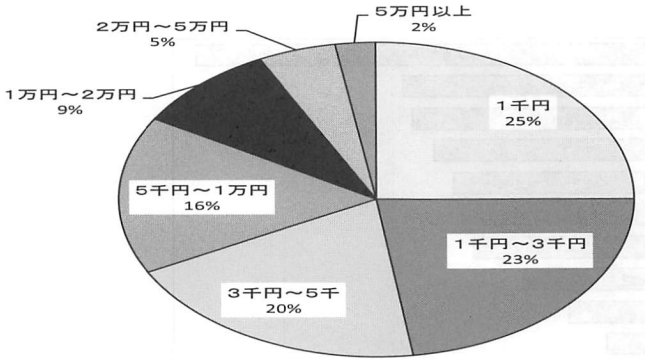
回答率の高い順にみると、「楽しみが増え、趣味が深まった」「専門的な知識・技能が深まった」「教養が高まった」などとなっている。社会活動や地域活動につながる「家庭生活をよくするのに役だった」「地域や社会の動きについて、知識や関心が高まった」や「職業に必要な知識や技術が身についた」などを選んだ人は少ない。趣味や教養などの学習で得た知識や技能が大きな割合を占めており、社会活動や地域活動につながるような学習成果が得られていないことが示された。

クロス集計での「毎月の収入別」をみると、「10万円未満」の人では「楽しみが増え、趣味が深まった」(59.2%)、「新しい友人が増え、交友関係が広がった」(32.5%)、「もっと学習したい意欲がわいてきた」(29.2%)が続く。「10～20万円未満」では「楽しみが増え、趣味が深まった」(48.7%)、「もっと学習したい意欲がわいてきた」(30.8%)、「気分転換ができるようになった」(28.2%)と回答した人の率が高い。「20～30万円未満」では「楽しみが増え、趣味が深まった」(44.8%)が最も高く、「専門的な知識・技能が深まった」(34.5%)、「教養が高まった」と「健康づくりに役だった」(29.0%)があげられている。「30～40万円未満」では「楽しみが増え、趣味が深まった」(45.6%)、「教養が高まった」(33.8%)、「専門的な知識・技能が深まった」(26.5%)の順になっている。「40万円以上」では「教養が高まった」(42.4%)や「専門的な知識・技能が深まった」(42.4%)が高い率を示しており、「職業に必要な知識・技能が深まった」(27.3%)が続く。「楽しみが増え、趣味が深まった」(34.8%)も高率であるが、これは他の収入の少ない人たちと比較すると相対的に低い。学習成果の活用という点については、特に特徴的なことはみられなかった。この設問でも「定年退職せずに働いている」人が、職業や仕事に関連する知識や技能を求めている。趣味的な学習への参加の喜びや気分転換を学習成果として感じている人は、男子では65歳以上、女性では60歳以上にみられ、年齢の高い高齢者が求めている学習として「趣味」「楽しみ」「気分転換」といったキーワードがあがる。収入の多い人ほど専門的な知識や技能を求め、教養についても収入との相関が強い。収入の少ない人は、「楽しみ」「趣味」や「交友」に学習の喜びを感じている。

2.8 高齢者が最も熱心に学習したことに関わる1か月の経費

高齢者は学習活動に月額でどれくらいの経済的負担をしているのか。(Q59)

Q59高齢者が最も熱心に学習したことに関わる経費
（%，N=555）



「1千円未満」という回答が一番多く25.0%、次いで「1千円～3千円」「3千円～5千円」「5千円～1万円未満」の順になっている。「1万円未満」の経費負担の人が全体の83.5%を占めている一方で、「5万円以上」「2万円～5万円未満」の人の合計が7.4%いる。高齢者のほぼ半数が3千円以下の経費で学習しており、8割強が1万円以下となっている一方で、2万円以上の人が7.4%存在し、二極化している。

学習のための経費に関わるクロス集計で「学歴別」をみると、「中学卒　高校卒」の人では「1千円～3千円未満」(26.8%)、「1千円未満」(25.%)、「5千円～1万円未満」(18.4%)の順であった。「専門学校卒　短大卒　高等専門学校（高専）卒」の人では「1千円～3千円未満」(26.1%)、「1千円未満」(22.6%)、「3千円～5千円未満」(21.7%)だった。「大学卒　大学院修了」では「1千円未満」(26.3%)、「3千円～5千円未満」(19.8%)、「1千円～3千円未満」(17.8%)であり、どのグループも5千円未満の経費の人が多い。

「仕事の状況別」のクロス集計では、「定年退職せずに働いている」人は、「1千円未満」(29.9%)、「1千円～3千円未満」(20.3%)、「3千円～5千円未満」(18.2%)で、「定年退職したが、今も働いている」では「1千円～3千円未満」(29.4%)、「1千円未満」(24.7%)、「3千円～5千円未満」(20.0%)の順であり、「定年退職をし、今は働いていない」人も同様で、「1千円～3千円未満」(22.3%)、「1千円未満」(21.9%)、「3千円～5千円未満」(20.5%)である。

「性別・年代別」のクロス集計では、「男性」は「1千円未満」(26.5%)、「1千円～3千円未満」(25.2%)、「3千円～5千円未満」(18.9%)となり、「女性」は「1千円未満」(23.3%)、「3千円～5千円未満」(20.6%)、「1千円～3千円未満」(19.8%)である。「3千円未満」でみると「男性」が51.7%であるのに対して「女性」は43.1%となり、高い経費をかけている人の比率は「女性」が「男性」を上回っている。年代別とのクロス集計からみると、「女性の50歳～54歳」で「1千円未満」の人は42.4%あり、「女性の1千円～3千円未満」になると9.1%であった。

「毎月の収入別」のクロス集計では、「10万円未満」の人は「1千円未満」(27.5%)、「1千円～3千円未満」(21.7%)、「3千円～5千円未満」(19.2%)であり、「10～20万円未満」の人は「1千円未満」(23.7%)、「1千円～3千円未満」(23.7%)、「3千円～5千円未満」(19.2%)である。「20～30万円未満」の人は「1千円未満」(29.0%)、「1千円～3千円未満」(22.1%)、「3千円～5千円未満」(20.0%)で、「30～40万円未満」は、「1千円～3千円未満」(27.9%)、「3千円～5千円未満」(22.1%)、「1

千円未満」(19.1%)、「40 万円以上」の人は、「1 千円未満」(21.2%)、「1 千円～3 千円未満」(18.2%)、「3 千円～5 千円未満」(18.2%)であった。経費と学歴との相関はほとんどみられないが、学歴の低い人たちで高い費用を負担している人は少ない。定年後も働いている人とそうでない人を比較しても差異はみられず、「女性」は「男性」よりも経費をかけており、毎月の収入でも全体傾向と著しい差異はない。

2.9 高齢者の学習活動に関わる調査結果のまとめ

調査結果から高齢者の学習活動の実態をまとめると以下のようになる。

1．高齢者の学習活動への参加については、IT 機器を活用した学習活動、文化・教養や趣味に関わる活動、家庭生活に関わる活動が中心となる。加齢に伴う変化があり、仕事を終えた後では「身体を動かす活動」「趣味などでのつきあい」が中心となる。どの年齢層においても社会参加や地域活動に対する意識が低く、「家庭での団らんや家族ぐるみの活動」「趣味などを通して知り合った人とのつきあい」「職場や仕事関係の人とのつきあい」などの学習参加では、所得階層と学習参加度が相関する。「携帯電話やパソコンでインターネットや電子メールの使用」「家事や育児の分担」「手工芸、楽器演奏、絵を描く、囲碁、俳句などの趣味的な活動」は所得の低い階層の人の参加度が高い。

2．高齢者が希望する学習方法では、個人学習の割合が高く、経費負担が学習方法の選択に影響を与えている。中等教育卒業者は高等教育機関での学習参加に抵抗感があり、公的社会教育の場への学習要求が高い。IT 機器を活用した学習は学歴とは結びつかない。男性は個人学習を好む傾向にあり、女性は集団学習への参加意識が高く、高齢期後半になると人間関係が中心となる学習に関心が向くが、個人の学習活動の多様化や高度化を促進する要因は当人の収入に規定される。

3．高齢者の学習要求・関心レベルについては、壮年期後期や高齢期前期で働いている人たちの学習関心は低いが、女性の 2 割の人々は学習意欲が高い。また個人の収入と学習要求・関心レベルとは相関が強い。

4．高齢者の学習活動に対する要求や関心のある学習内容については、健康管理や病気の予防に関わる学習や体育・スポーツ・レクリエーションに関心が高い。教養的なもの、趣味的なもの、外国語に対する学習要求が高い。一方で、社会参加・社会貢献型学習については積極的ではない。職業上の知識やスキルに対する学習要求は当人の離職とともに減少し、収入の多い人は教養重視の傾向にある。

5．高齢者の学習開始時や継続時における学習環境の問題については、学習を阻害する要因に経済的負担、時間の確保、学習場所などの学習者の境遇がある。クロス集計では性差に関係なく、時間のやりくりが大変だという認識があり、男性は加齢に伴って一定程度解消されるが、女性は問題が解決されることが難しい。

6．高齢者の学習評価については、趣味や教養などの学習で得られた知識や技能を高く評価し、社会参加・社会貢献型学習についての評価は低い。クロス集計では、離職していない人は、職業や仕事に関する知識や技能の習得を求めている。趣味的な学習への参加の願望は、男性で 65 歳以上、女性で 60 歳以上であり、高収入の人は専門的な知識や技能、教養を強く求めており、学習への評価が高い。

7．高齢者の約半数は月額 3 千円以下の経費で学習しており、8 割強の人々の学習経費は 1 万円以下である。一方で、月額 2 万円以上の人が 7%強存在し、学習活動でも階層の二極化が進んでいる。クロス集計では、学歴の低い人たちは経費負担

が少ない。離職者と非離職者に経費負担の差はなく、女性と男性の比較では女性の方が経費を多くかけている。経費負担の問題が学習者に大きい影響がある。

3．高齢者の学習参加と経費に関わる課題

3.1 高齢者の学習活動への参加と境遇に関わる問題

高齢者は、加齢に伴う身体的減退と闘いながら、より良く生きたいという願望を持って生涯学習に臨んでいる。調査結果にも見られるように、生涯学習活動への参加の願望は人によって異なるが、参加することによって得られるものは決して少なくないだろう。「楽しみが増え、趣味が深まった」と回答した人が約半数に達しており、「生きがい感」や「充足感」を読み取ることができる。

しかし、さまざまな学習阻害要因の存在が指摘されており、学習者の経費負担、時間の確保、学習参加の契機の設定、学習場所等の要因があり、学習境遇に関わる問題が多く存在することが示された。

3.2 学習経費の実態と問題

本調査で明らかとなった問題の一つが、３分の１以上の高齢者が「経費のやりくりが大変」だと回答している点である。学習経費について、ほぼ半数の人が月額「3千円以下」、多くの人が月額「1 万円以下」であり、学歴が低く、年収が低い人たちに影響を与えていることがわかった。年収が低い人は、意欲的に学ぶことができず、多様で高度な学習機会を得ることが難しい状況にあり、年収の多い人と少ない人の間で、学習方法及び学習内容で格差が生じている。年収が低い人たちの学習活動への参加や学習方法をみると、IT 機器を活用した学習、家事や育児の分担や公的社会教育などであり、これに対応した学習プログラムの開発が求められている。離職者と非離職者の間では、経費負担の差はほとんどみられず、女性の方が男性よりも経費負担が多い。学習にかける経費と学歴とで明確な相関はなかったが、学歴の低い人たちで高い費用を負担している人はほとんどいなかった一方で、学歴が高く、収入が多い人は専門的で高度な学習を求めている。

3.3 学習経費の問題に関連する学習支援上の課題

調査結果から学習支援上の課題をあげると以下のようになる。

1．学習の IT 化のさらなる推進を図り、学習の内実化を図るための手立てを講じる。さまざまな IT 機器に対応する学習ソフト開発に取り組む。
2．公的社会教育の場を充実させる。多様で高度な学習機会を含めた、高齢者に見合った幅広い学習内容と学習方法を提供する。
3．学習経費のコストダウンや資金提供のためのシステムづくりを進める。

以上で本研究のまとめとするが、学習活動の経費の問題は今後の重要課題となることは確実であろう。早急に支援体制を考える必要があると思う。（了）

【参考資料】

超高齢化社会における生涯学習の在り方に関する検討会『長寿社会における生涯学習の在り方について～人生 100 年 いくつになっても 学ぶ幸せ「幸齢社会」～』，文部科学省，2012